

入院分娩・母乳育児相談

とも子助産院

助産師 伊藤朋子

〒981-3124

仙台市泉区野村字野村95-6

TEL 022-772-5960

メール tomo@tomo-j.jp



平成23年6月

震災お見舞い申し上げます。

ご支援くださった みなさま、ありがとうございます。



2011年3月11日、どこでお過ごしたでしょうか？ 今、ご無事でおられますことを、心から願います。

いまだに、毎日数回の余震がありそのたびにドキドキします。大地震から3か月がたちました。あんな大変なことがあったのに、いつものように春がきて、夏になろうとしているのが不思議な気がします。隣の田んぼも遅い田植えが終わり、カエルの合唱が賑やかです。軒先のツバメの子育ても順調で、間もなく巣立ちの様子です。

あの日、隣の畑からは水が湧いて流れていました。液状化です。助産院の駐車場が10cmほど地盤沈下しました。車高の低い車はご注意ください。入口でゴトン！とお腹をこするかも…。余震が終息してから修繕かな。

第1震。あらゆる物が散乱。助産院の壁や設備の損壊多数。でも肝心の構造部分には問題がなく、きちんと床は水平を保ち、扉の建てつけも完璧。けが人も出ず、夫の実家である工務店が丈夫に建ててくれたことに感謝でした。「必ず来るぞ！」と言われていた宮城県沖地震です。あれこれ防災グッズをとりそろえ、構えて待っていた感もあり、地震の当日は「おお、とうとう来たな！」と迎え討つくらい気分でした。お預かりで助産院にいた赤ちゃんも、在宅療養中だった父を点滴ごと車に避難させ、貯め込んでいた非常食や古い石油ストーブ、キャンプ道具などをいそいそと並べ、湯たんぽを作ったり、街中が停電で妙にきれいすぎる星空を夫と見上げ、絶対電話が鳴らないという異常事態に一瞬の解放感さえ覚える不謹慎さでした。父母の避難している車には、のんきな昭和の懐メロを流し現実逃避。ワンセグに津波や火災の映像が流れ、妊婦さんや赤ちゃんたちがどうしているか心配でたまくなりました。ラジオは緊迫した声の報道を繰り返し、耳にするたび胃がギリギリするので、なるべく情報を遠ざけました。翌朝、河北新報の配達員さんが、いつものようにバイクで配達に来てくれました。驚きました。助産院に入ってみると割れ物だらけで、じゃりじゃり、どろどろ。土足でないとながれず、初めの2週間は2階・3階にいるのも怖くて、1階の父母の部屋と玄関ホールだけで寝起きしました。

震災2日目の夜には、父が寝ている介護ベットの足元で、赤ちゃんが生まれました。

普段なら絶対ありえない情景です。産婦さんたちは冷静で立派でした。そんなライフラインの停止中、2件のお産がありました。懐中電灯とランタンの明かりでのお産。静かで厳粛な気持ちになりました。つるりと元気にかわいく誕生した、おりこう赤ちゃんたちでした。



これまでの災害研修では、「とりあえず3日間サバイバルを！」とのことだったのに、うちの地区に水と電気が戻って来たのは、震災後5

日目でした。電話は6日目。そして、通信が回復すると、今度は電話・電話の嵐でした。



しずまれ、大地。鎮まれ、原発。

遠方からの必死の問い合わせや相談が殺到しました。自宅が被災したり、ガソリンもなく、出勤できるスタッフが少なかった所以对応しきれませんでした。3月だというのに、雪が降りました。直接助産院に歩いていっちゃう妊産婦さんも多かったので、現場対応に徹したいと思い、電話はしばらく助産師仲間に転送し対応してもらいました。とも子助産院にかかった電話は、東京・神奈川・神戸・香川・・・日本中の助産師が受け止めて、受話器の向こうで応援してくれました。



支援物資に救われました。沢山の方々から、「大丈夫？欲しいものはない？」と心配していただきました。特にガソリンは、2週間たっても手に入りにませんでした。困ってブログに書いたら、携行缶でガソリンを他県から届けに来てくれたママまでいました。被災したスタッフ家族が助産院に避難してきており、共同生活できたのも、心強かった…。こども達が一緒にいてくれなかったら、がんばる気力が出なかったと思います。

そして、やっと片づけものがひと段落した4月7日、深夜に第2震。これでもかっ！とムキになって、固定していたはずの電子レンジやテレビも吹っ飛び、せっかく並べた食器はまた全滅。ああ、自然の脅威。この2震目の方が、物質的にも心理的にも被害が大きかったです。地震の神様と根性比べしているようでした。でもでも、またまた、食器・マスク・こども服・紙オムツ・お菓子・パン・お茶・ハートのキルト・・・全国からの支援の

シャワーを浴びて、正気に戻りました。冷蔵庫掃除に来てくれたスーパー主婦グループもありました。がっかりしてなんか、いられない！感謝の気持ちでいっぱいです。私は、助産院や家族を守るのに必死で、避難所

へボランティアに行く余裕もなく、申し訳なく感じていました。「私だけ **ひきわけよう・つながろう・あきらめない。**安全地帯にいて、後ろめたい・・・。」と同じことを言うお母さんから、沢山お手紙やメールをいただきました。まだまだ困難な生活を強いられる方の事を思うと、心が痛みます。でも、現地に行くだけが支援ではありません。普段の暮らしを淡々とこなしていくということも大事です。

自然に勝負を挑むのではなく、引き分けの加減を心に留めながら、暮らしていきたいなと思います。

無料の助産院ケア提供中

被災母子支援事業：宮城県助産師会が義援金をもとに始めた事業です。津波が来たり、家が壊れたりしなくても、震災によって困ったことがあった方は対象になります。助産院のケアが無料で受けられます。罹災証明書の提示は、不要です。

善意による支援物資の粉ミルクでしたが、母乳の出ているお母さんにも届けられてしまったことや、いろんなストレスが重なり、母乳育児率が相当下がっている感触もあります。母乳は、最良の非常食です。続けて欲しいです。

病院も被災していることから、産後の入院日数が少なくなり、育児に不安を抱えたまま退院されているかたも多いと聞きます。きっと病院スタッフも、心配しつつ退院許可を出していることでしょう。そんなときこそ、地域の助産師の出番です。来年の5月14日まで行われる予定です。

家庭訪問や産後入院無料の事業も始まっています。母乳マッサージだけでなく、育児相談など宮城の開業助産師のケアも無料になります。ご利用の際は、通常通り電話で予約を下さい。

母子手帳をお持ち下さい。



UMIのいえ主催

癒しの助産塾 8月6・7日

作並温泉にて、助産師対象に開催。

八幡悦子・塩野悦子

齋藤麻紀子・伊藤朋子

ナースアウトin仙台 8月8日(月)

世界中のママと、パイパイの日の11時にせいので1分間同時に授乳するというイベント。仙台は、去年初参加。今年もしようか・・・と企画中。実行委員ママ募集中。

仙台七夕に折り鶴を送ろう

仙台七夕まつり 想いをひとつにプロジェクト

折り紙サイズ：15センチ角

色：赤・水色・黄・黄緑・白の5色

短冊：14センチ×4.5センチ

直接河北新報に送る方：締め切り：7月20日

宛先：〒980-8799 郵便事業会社

仙台支店留 河北新報社 折り鶴係

とも子助産院に届けてくれる方は

締め切り：7月16日(土)

ご支援くださる方へ・・・ご紹介・・・

とも子助産院サイトの震災関連ページにリンクあり。

世界中の女性たちが安全に産み、育てられる環境を

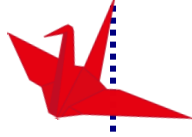
実現することを目的として

日本生まれの国際協力NGO



伊藤が、敬愛する

八幡悦子助産師主催のNPO



父のこと・・・

ひたすら几帳面でまじめで穏やかな父でした。気の利いたことを言われた記憶はないけど、愛してくれていたなあと感じます。2月半ばに余命わずかと宣告をうけ、自宅におりました。地震のあと2週間目に永眠しました。75歳でした。

歌が好きで病室で付き添いをしながら、よく童謡と一緒に歌いました。意識ないのかなと思って適当にふんふん・・・と歌っていると、「こうだよ」とポツと歌詞を教えてくれたり、びっくりするようなことも、時々ありました。こどものころ家族で車でどこかにいくときは、よく歌のしりとりをして長いドライブの暇つぶしに遊んだなあと思い出しました。

1月4日に倒れ、救急車を呼びました。搬送先の大学病院や通信病院でも良くしていただき、これといって不満もないのですが、そこで過ごした日々は、やはり借りものの時間だったように感じます。あのまま入院させておけば、もう少し長生きできたかなあとも思うのですが、2月半ばに家に帰ってからは、本当の家族の時間が過ごせたように感じるし、介護に参加できたことで、看護職としての私の気持ちの納まり所も良かったのです。往診して下さっていた福島先生は、「悔んではいけませんよ。」とFAXをくださいましたが、何かというと涙がこぼれてしまいます。

昨年10月には夫の母が倒れ、20日間の闘病ののち68歳で急逝してしまいました。立て続けの出来事だったので、寂しさが募ります。

地震の日、母が外出するからというので、私は、たまたま父母の部屋におりました。スタッフたちも、お爺ちゃんのところでお茶にしようと、お預かりの赤ちゃんも連れて1階に下りてきていました。あの時間に1階にみんながいるなんて、普段にはありえないことです。これは絶対、父に守られたなあと思います。あちこちの携帯で緊急地震速報がピロリンピロリンと鳴る中、すぐ外へ避難することができました。

また、父が認知症を患ったことで、今まで知らなかった介護の世界を垣間見ることができました。システムティックな介護保険の仕組みに関心させられたり、医療の業界の体質の古さを再確認したり。また限界も考えさせられました。地震の後も介護チームの皆さんのプロ根性は、たいしたものでした。ケアマネさん、ヘルパーさん、訪問看護師さん、入浴サービスの介護士さんも、皆みんな雪の中、何時間も歩いて状況確認に来てくれたのです。「何日も家に帰っていない。」と

言っていた救急隊の皆さん。通信病院は再入院こそ **元気出していきましょか** できなかったけど、地震の被災者対応でいっぱい

いっぱいなのに、応急処置をして下さった。そして最後は、仙台徳洲会病院が看取って下さいました。水も暖房も止まっていた。病院では、私たちの希望をかなえてくださり、痛そうな処置もなく、モニターの音もなく、父は静かに旅立って行きました。

震災で仙台の斎場はバンク状態だったため、葬儀は父の郷里の秋田県湯沢市で行いました。亡くなった3月24日は東北自動車道が再開した日でした。。こんなことがなければ、父の郷里で、故郷の言葉を浴びながら、葬儀をするなんてことはなかったでしょう。親戚たちの秋田弁が肌にしみこむように嬉しかったです。ふるさは、ありがたいものです。

こんな伊藤家です。とも子助産院ともども、今後ともよろしくお願いします。

